

私の東日本大震災被災避難者への医療活動

長岡市・さえき内科

佐伯 牧彦

当院の周囲には大きな避難所はなく、長岡市開設避難所での被災者に対する支援では活動はしていません。南部体育館に避難中でインフルエンザに罹患された患者さまと付き添いが隔離されている老人の家“刈谷田荘”に2回巡回にいったのと、そこで気管支炎になりかかった方を当院で診療しました。

折角の機会ですので、私が囑託をしている特養（以後“私の特養”とします）でお預かりしている南相馬市の老健からの被災者の話をさせてください。その老健は東電福島第一原発から10km内にあるとお聞きしましたが、あの3月11日以降従業員の避難を各自の判断に任せたため、9割が不在となり、1週間強を残りの従業員で支えていたそうで、給食員も足りず1日1食だったとか。特養など10か所余に分かれてお預かりすることとなり、やっと21日に長岡へバスで避難されて、私の特養には13名が入所されました。

到着は19時を回っていたと記憶しています。1階で簡単に診察した後上がっていただきましたが、疲労が強く車椅子に座っているのが精一杯という方もいました。落ち着くまもなく一人の方が突然亡くなりました。

その後は皆さん、徐々に元気になられているかに見えました。一人は他県の老人ホームに移られました。一人の方は徐々に嚥下がわるくなり全身状態が徐々に悪化、家族と相談しましたが、とても温かな皆様で、精密検査は回避、経管栄養もさせたくないとの希望でした。ただ、家族の所業があり枕元に居られないので何とかそこまでもたないかということです。結局、状態をみながら少し点滴をすることとなり、所要は無事努められ、ご本人は結局亡くなりましたが、家族は感謝されてお帰りになりました。

今私の特養では10名の方をお預かりしています。総合病院のお世話になった方もいますが、この原稿を書いている時点では全員が私の特養に居ます。慣れない長岡弁の介護に違和感はあるようですが、「まだ暫く帰られないようだから、来年の正月はここで迎えようね。」と話すとき笑いされる方もいます。

私の提案は、老人施設に入所中の方について、もう少し早く集団避難ができなかったか、の1点です。英断をされた私の特養の理事長に心より敬意を表します。